

# Physical Arts No. 6

Society for Studies of Physical Arts

身体運動文化学会

会報 第6号

●平成11年7月16日●

編集発行

身体運動文化学会

会長 高橋 進

## 運動文化における基本・基礎

身体運動文化学会

理事 坂手 比呂志

21世紀を迎える人類は、最先端技術に没頭し、豊で便利な合理的社会を完成させつつあるといえる。その反面、人類として反省し、立志する必要性も忘れてはならない。それには、未来を予測し物事に対応できる人間と、自然環境との共存共栄を考えられる創造的社会が必要となろう。そこで、身体運動文化としてのスポーツ、特にスキーが、その創造的社会の一助を担えるように、また、人間性の回復に繋がるスポーツとして、いかに役立つことができるかについて検討したい。

スキーは、冬、天からの贈り物によって、楽しめるスポーツといえる。その贈り物の雪は、紛れもなく自然の恩恵を受けている。まさしく、自然環境との共存共栄を感じさせてくれるスポーツである。日本スキー教程（1994年発行）によると、スキーの本質的価値を次のように述べている。「スキーをするとき、人は日常生活のさまざまな拘束を束の間忘れ、雪の中で夢中になって活動するうちに、知らず知らずのうちに『全き人間=ヒューマニティー』を取り戻すことができる。すなわち、スキー・スポーツの本質的価値を一言で表現すると、『人間性の回復と構築』に尽きる。」とある。この、スキー・スポーツが文化として好位置を確保し、将来にわたって人間性の回復という役目を担うためには、ここで、最も大切なことが基本・基礎である。そのスキーを楽しむための、スキー技術を習得するためには、技能を高めて行く学習課程が必要になる。

ところで、基本と基礎を同じように使う場合もあるが、私は、基本をスポーツを行う前提条件、つまり創造性、心構えとし、基礎をスポーツを行う初めの、習得すべき技術と捉えたい。基本の上に基礎を大切にこそ、感動を与えるパフォーマンスが生まれる。基本があってこそその基礎である。それは、スポーツ文化が人々の心のよりどころとなり、我々人間の中で生き続けることに繋がる。また、前書によると「スキー・スポーツでは、自然のキャンパスの中で活動するだけに、対自然、対人間への、素晴らしい倫理的行動が明確に現われ、遊び、身体活動、挑戦、情報伝達を繰り返し行ううちに、自由、創造、成熟、そして豊かな気持ちなどを体験し得る。このようにスキー・スポーツを通して『身体的教養=スポーツ・ヒューマニティー』を高めることによって、私たちは、より潤いのある生活文化を構築することが可能になる」と続けている。このことにより、スキー・スポーツの生涯学習としての意味と価値が顕在化してくるものと確信する。このあたりに、運動文化における基本・基礎の目的が潜在しているのではないかと提言したい。

(略歴など) 文部大臣認定公認スキーA級教師、SAJ・A級公認検定員、SAJ・ブロック技術員、滋賀県スキー連盟理事、

ミズノモードデモスキーチームコーチ、神戸学院大学非常勤講師。



## 武道用具の材質と技術

筑波大学

入江 康平

私たちが日常使っている生活用品の素材は、かつては動植物性のものや金属性のものを中心であったが、戦後急速な化学研究分野の進歩によりさまざまなすぐれた新素材が開発・実用化され便利になった。しかしこのようなことは日常生活用品に限らない。

今日私たちが使用しているスポーツ用具をみても、天然の素材の割合はきわめて少ないことに気が付く。近年各スポーツ種目で使用されている用具の材質や機能・形態は記録の向上や使いやすさ、安全性確保などを目的としてさまざまな角度から研究開発が進められている。

さて、よく武道は日本の「伝統的身体運動文化」であるという云い方がされる。「伝統」には保守・保存・継承などの意味内容がある一方、発展を示す流動的、創造的な意味もある。しきたりやきまりを重んじ、もっとも保守的とされる武道の世界でも、使用する用具の材質に新しく開発された新素材が使用されるようになった。私の記憶によれば、剣道では昭和三十年代後半にグラスファイバー製の竹刀の試作品がつけられたのが最初であろう。この竹刀はとても実用に耐えられるような代物ではなかった。その後さまざまな工夫・改良が加えられ、近年になり実用に耐えられるかなり性能の良いカーボン製竹刀が開発されているが、打突時に受ける相互の衝撃の問題や、竹製竹刀と比較し微妙に感触に違和感があることが報告されており、厳密に言えば手の内の動きにも微妙な影響が起ることが考えられる。

また先般の新聞記事によると面の横金14本の内、上下数本を残し中央部分に透明なポリカーボネート樹脂を使用した面が開発され、青少年の稽古用を中心に使用を奨励するそうだ。顔の表情がよくみえるので、これまで竹刀剣道ではあまり云われなかった目の動きや表情から相手の動きを予知する技術が強調されるようになるかも知れない。

一方弓道ではどうだろうか。和弓は9～12片の竹と木から成り、握り部が中央より下にあり、複雑な曲線と各部分の動きに微妙な相違があるので、グラスファイバーやカーボン材で作ることは難しいのではないかとされていた。確かに昭和四十年代前半始めて作られたグラスファイバー製弓は和弓の形はしていたが、機能的にはひどいものであった。しかし今日では竹木弓と比べても遜色のない程の性能の良いものが作られるようになった。しかし、力学的な実験によればこのような新素材製の弓と木竹製の弓とでは復元の経過が相違するので、自ずと手の内の働かせ方も違ってくらしい。また狂いの少ないカーボンやグラスファイバー製の矢の開発、弦も宇宙飛行士の命綱の開発から生まれたとされる強力な化学繊維が使用されるようになった。

勝利するためのスポーツの技術と使用する用具とは密接な関係がある。新素材製の用具の使用によりその特徴を生かした新しい技術が開発され、驚異的な記録が次々と更新された例を私たちは知っている。私たちは今日の武道の在り方は昔から変わっていないものであるように思い込み勝ちであるが、近代になってからも技法上微妙な変化があることがみてとれる。スポーツ界は今後ますます新素材を使用した用具の開発と新しい技術の開発に激しさを増すであろうし、それが競技規則の変更にまで及んでいる。武道界が掲げる高邁な理念や武道の技法、さらには競技規則までも以外と用具の材質や機能に左右されるような時代が来るかも知れない。

不易流行という言葉があるが、加速する国際化の中で今後起り得るであろう武道の在り方に関するさまざまな問題について、武道が武道としてこれだけは譲れないという部分と、許容出来る部分に関する基本原則について考えて置くことは必要であろうと思う。その時になってあわてないように……

## 運動文化における基礎・基本

—わが国固有の運動文化の1つとしての剣道に求められる基礎・基本—

東京大学・生命環境科学系

和久 貴洋

### ■スポーツを始める前にウォーミングアップを適切に行なうことができるか

一般体育の授業において、「10分間」という時間のほかには特別な指示を与えずに、学生自身に自由にウォーミングアップを行なわせたことがある。ほとんどの学生はいわゆる静的ストレッチを行なって10分間を過ごした。ウォーミングアップで重要とされる体温を高めるようなプログラムを行なった学生はいなかった。小学校～高校の体育において、ウォーミングアップに関する教育を受けているにも関わらず、適切にウォーミングアップを行なう習慣は形成されていなかった。

### ■日常生活のなかでスポーツをする人は増えたのか

これまで一部の競技選手で行なわれてきたスポーツ活動に一般市民も参加するようになり、スポーツを行なう人は増えたといわれている。国民生活時間調査の結果によると、確かに、日常生活の自由時間にスポーツ活動を行なう人の割合はこの20年間年々増加している。しかし、実際のスポーツ実施率は十数%である（ちなみに自由時間にテレビを観たという人は90%を超える）。スポーツを日常生活に取り入れる人は増えてきているが、実際にはまだ国民全体の1割程度である。

### ■マスメディアから伝わるスポーツ情報の価値

国内外のスポーツイベントがテレビで放映されるようになり、スポーツを見る機会は著しく増えている。このような中で、マスメディアから伝わるスポーツ情報に疑問を抱くことは多い。1998年1月30～31日、神戸においてアンチ・ドーピング国際会議が開催され、アンチ・ドーピング神戸声明が発表された。各社新聞において会議の開催は報道されたが、声明の内容を伝えたのは私を知る限り1社であった。なぜ声明の内容は伝えられなかったのか？この声明はわが国のスポーツ界にとってどのような意義をもっているのか？こればかりでなく、最近の勝負やメダル数のみにこだわった報道、選手のプレー、あるいは競技とは無関係な報道に疑問を抱くことは多い。

### ■このままでよいのか？わが国のスポーツ文化

このような現状をみると、「わが国のスポーツ文化はこのままでよいのか」と考えてしまう。“わが国のスポーツ文化はどうあるべきか？”、“望ましいスポーツ文化とは？”と問われたとき、少なくとも、スポーツに専門的に携わる我々はその問いに対して明確に答えられなければならない。そのために必要なのは「国民がそれぞれのライフステージにおいて、スポーツとどのように関わりを持つべきか」というビジョンをもっていることである。

平成9年9月に出された保健体育審議会答申では、人の生涯を8ステージにわけ、それぞれのステージにおいてスポーツとどのように関わるべきか、そのビジョンが述べられている。「国民一人一人が、それぞれのライフステージに応じて、主体的にスポーツを行なったり、スポーツを見るなどしてスポーツを楽しみ、スポーツに親しむ態度や習慣」をスポーツ文化と捉えるならば、スポーツ文化の基礎・基本は生涯にわたる国民とスポーツとの関わりについてのビジョンと捉えることができる。

### ■運動文化における基礎・基本

「運動」という語には、体育・保健や楽しみのために身体を動かすことという意味があり、スポーツ、武道、芸能、祭りなどあらゆる活動が含まれる。しかし、わが国固有の運動文化というと、剣道や柔道などの武道がその代表としてあげられる。

最近、わが国の剣道界において剣道人口の減少が重要な課題として取り上げられている。この問題を考える際に重要なことは、国民が日本固有の運動文化の1つとしての剣道とどのように関わりをもっていくかというビジョンを明確にすることである。国民一人一人がわが国固有の運動文化の1つである剣道に親しむ態度と習慣は、長期的・具体的なビジョンなしに構築することはできない。

## 運動文化における基礎・基本

筑波大学大学院・体育科学研究科

唐沢 優江

「運動文化における基礎・基本」というテーマですが、専門である舞踊の視点から、また、自分の体験の中で感じたことを含めて述べさせていただきます。

舞踊を運動文化としてとらえ、基礎・基本を考えると、ダンス・クラシック（バレエの技法）では、アン・ドゥオール（脚を外側へ開くこと）、アプロム（安定性）、エレヴァション（跳躍）を原則とし、モダンダンスでは、重力を利用したフォールとリカバリー、胴のコントラクションとリリースといったテクニック、能や日本舞踊における型、と原則が多様にあげられます。それらは時代や地域の文化を背景として編み出された型であります。そうした体系化された技術に共通する根本的な基礎・基本とは何でしょうか？

バレエを象徴として現象学的に分析したツァハリアスは、バレエの基本である脚の外旋を身体の一部をもぎとる犠牲的行為としてとらえ、「舞踊家が舞台でみせる光輝や軽快さとは<十字架>を前提とした<復活>なのである」<sup>1)</sup>と述べています。ドイツ表現舞踊のヴィグマンが「恍惚なしに舞踊は存在しえないし、形式なしに舞踊は存在しえない」<sup>2)</sup>といい、日本の舞踊について郡司は、「舞踊の生命はポーズやパにあるのではない。その連続に生命感をもたせることにある。生命感とはリズム感にはかならない。日本ではこれを間という。舞踊は技術をのみみせるものではない。その技術を支えている精神がものをいうのである。」<sup>3)</sup>と述べています。こうした記述からも、共通するものとして、ある種の型と、その中に流れる精神的なもの、つまり日常とは異なる意識があげられます。

通常私達は目に見えるもの、耳に聞こえるものに意識をはたらかせていますが、舞踊の稽古ではまず、日常では外に向いている意識を身体の内に向け、指の先、足の先まで意識を働かせます。特に舞踊は、神への礼拝を起源とするため、恍惚状態、非日常的な意識状態が鍵となるようです。

能は型が重視されますが、白州は「型は静止したものではなく、絶え間なく動くもの」<sup>4)</sup>とし、「つぎからつぎへひとつの型の上につきの型が重なり、またその上へ重なることによって舞が成立する」<sup>5)</sup>と述べています。型はガチガチに緊張した状態ではなく、身体はリラックスし、意識によってコントロールされるものであると考えられます。身体を凝り固まらせず、風の通るような柔軟な状態にし、身体の中の流れや、身体と世界（空間、地面、相手など）とのつながり（関係）をコントロールすることが舞踊の基本と考えられます。

身体運動文化全般において、こうしたリラックスした身体と、その中を流れる意識が基礎・基本となるのではないのでしょうか。あらゆる情報にあふれている現在、何が正しいのか、何をすればよいのか迷うことがあります。けれども、自分の身体に意識を働かせることによって、思いがけない発見があり、氾濫する情報に惑わされない、真の自己表現が生まれるのではないのでしょうか。既成の型や技術は、その入り口であり、その源はひとつにつながっているように思います。

1) ゲルハルト・ツァハリアス（1965）バレエ 形式と象徴. 渡辺鴻訳 美術出版社. p.51

2) ジョン・マーチン（1980）舞踊入門. 小倉重夫訳 大修館書店. p.223

3) 郡司正勝（1959）おどりの美学. 演劇出版社. p.18

4) 5) 白州正子（1974）お能. 駸々堂出版社. p.54-55

## 今、この一冊

『マイネル遺稿：動きの感性学』

クルト・マイネル著 金子明友編訳

最近「身体」に関する著作を目にすることが多い。一見心理学がもてはやされているようではあるけれども、身体論もまた一つのブームであると言えるであろう。いわゆる「身体論」は、哲学、社会学、文学などの分野でいわば分野横断的に語られ始めている。しかし、それが「身体運動」となるとどうであろうか。「身体」までは語りえても、「身体運動」までを守備範囲に含めることはなかなか難しいのではないだろうか。それがさらに「身体運動文化」となると、そこまでカバーした書はおどろくほど少ない。

このような事情の中で、本書は「身体運動文化」について語っている貴重な本である。本書の構成は、金子明友日本女子体育大学学長が翻訳編集した「マイネル遺稿」と吉田茂埼玉大学教授の執筆による「論考」から成っている。「論考」は、運動学そのものの理解にも役立つ内容となっている。「遺稿」の目次を一応挙げると、第1章「動きの感性学的視座」第2章「動きの感性学的価値」第3章「動きの感性教育」となっている。訳文は、さすがに体育学の碩学が訳しただけあつて非常に読みやすい。

身体運動文化というテーマに対して印象的な言葉は次のようなものである。「今日、多くの種目や形式をもつわれわれのスポーツはまさにひとつの社会的所産なのである。技術のなかに潜んでいる法則性を発展させるためには、幾世代にもわたる多くの名もなき選手たちの貢献が実に大きい。今日、目のあたりにする技術の完全さはまさに幾世代にもわたる成果なのである。このようにして、スポーツにおける感性やその成果は決して自然からの贈り物などではない」(p.55)。単なる動きが法則を持つようになり、それが動きの美にまで高まっていく過程がある。このことに関しての詳細な考察は、残念ながら遺稿という性格もあってなされていない。しかし、身体運動文化における文化性と美の問題を考えるてがかりにはなるであろう。

さて、動きの感性学とは何を意味するのか？マイネルは感性学の領域を運動学との比較を通して次のように規定する。「運動学は分析的な道を歩み、概念規則、一般合法則性や原理という形式の中で考察を進めていく。これに対して、感性学は総合という道を求めて、現実在即したかたちのなかで考察を進め、スポーツの動きの調和、美しさ、優雅さ、エレガントさといった感性学的な判断基準を明確化していくのである」(p.14)。このような感性学における総合の立場は、そのまま動きの感性教育にも生かされている。とりわけ第3章はスポーツ指導における観察の意味を解き明かしてくれる。

学術の世界にも流行はある。現代では、心理と健康が流行の一端を担っていると言えるだろう。心理と健康は、それぞれ現代社会におけるところとからだの問題にアプローチする領域として注目を浴びている。だが、それぞれを突き詰めたところで人間の全体性の問題を見通せるものでないことは明らかである。身体運動文化が真に学際的な進路を取るのであれば、ところとからだという流行の隙間を埋める方向で人間の全体性を見通せるものでなければならないのではないか。このような身体運動文化学的な問題意識にとって、マイネルの論考は示唆に富む内容を持っている。

(岡山大学 関根 正美)

## 《私の研究テーマ》

武蔵大学  
上向 貫志

“私の研究テーマ”と題して会報委員の方から原稿を依頼され安易に引き受けたものの、よくよく考えてみると私の研究活動は現在開店休業中である。この書きだしの文句がすでに自身の防衛であることは承知の上である。さて、今更断ることもできず、ありきたりではあるがこれまでに興味をもって取り組んできた研究と、自分なりの今後の方向性？について述べてみたい。

スポーツ選手にとってその競技レベルに関係なく“怪我”はつきもの、と言われる。その怪我にまつわる心理が私の研究テーマである。これまでの数少ない研究の中で、今後の展開が期待できそうなものが“「負傷頻発選手」の心理的背景”と題した研究である。Ogilvieら（1966）の主張によると、無意識的動機が原因となり怪我をする負傷頻発選手には3つのタイプが認められる。それらは1）実際によく怪我をする選手、2）怪我の程度以上に痛みを訴える選手、3）怪我を装う選手、といった3タイプである。これらのタイプに当てはまると思われた7事例について、怪我に関わる特徴やロールシャッハ・テストから情報を提供し、その心理的背景について考察を行った。すべての事例についてそこでの心理力動を了解したわけではないが、数名の選手からは怪我の発生の背後に潜む無意識的動機が存在が示唆された。つまり、愛情や承認への欲求、劣等意識や疎外感、自己防衛の手段といったものである。

以前にプロサッカーチームの元監督とこの種の内容で話をしたことがあるが、彼曰く選手の怪我は99%環境、身体的（器質的）要因によるものであると言いきっていた。白らの選手・指導者の経験から見ても、無意識的動機とまででないとしても不自然な、あるいは了解に苦しむ負傷選手はいなかったというのである。少しでも理解・共感を期待していた私にとっては多少残念な思いもしたが、これが現実の現場ではなからうか（勿論すべての人ではない）。

最近、私が勝手に師と仰ぐ先生が、“「臨床スポーツ心理学」の方法”と題して論述されている。ここでは人間の行動を科学する上での客観性の問題、さらに臨床スポーツ心理学の方法として4つの側面から述べられている。その1つが「語れないもの」を語る：身体性、である。ここで、“「身体」はこれまでわれわれが「語れないもの」と考えていたものを語っていたのである。身体は語れないものを語るための「窓口」となるのである。”という記述がみられる。怪我の心理を研究対象とする場合、まさに身体を通して語られる1つのメッセージとして怪我を捉えることが必要だと考える。さらに次のように述べられている。“身体を窓口にするにしても、一方的に質問を投げ掛けるのではなく、研究者と対象者との間に深い相互交流があり、研究者側は被験者の内界にある現実に関わり、そして隠された意味を読み取る努力が大切となる。”私的なことではあるが、この4月から本務校に就くことができ、学生相談室という場に関わることとなった。身体を通して様々なことが語られていても、それに気づいたり聞いたりする力がなければそこから先は何も生まれてこない。被験者の内界に関わり、隠された意味を読み取る努力を行える場に恵まれたわけであるから、今後は自身の努力次第である。身体を通して語られるもの、特に怪我や痛みとして表現され、語られるものを読み取り、これまでの方法論から一歩進んだ（深い）研究をしてみたいものである。



《事務局便り》

★事務局移転のお知らせ★

この度事務局が移転いたしました。新しい事務局は、次の通りです。

〒651-2108 兵庫県神戸市西区伊川谷町有瀬518 神戸学院大学人文学部 前林研究室気付

TEL (078)974-1551 (内線2351) FAX (078)974-5689

E-mail maebayas@human.kobegakuin.ac.jp

新しい事務局におきましても、これまで同様、皆様の積極的な学会活動への参加を希望いたします。何に関しても結構ですので、斬新なご意見・アイデアなどございましたら、上記宛にお寄せいただけますようよろしくお願いいたします。

★会費納入のお願い★

当学会の活動は、会員の皆様の会費によって成り立っています。昨今、会費未納の方の割合が増え、今後の学会の円滑な活動に支障をきたすことも心配されます。未納の方は納入いただけますようよろしくお願いいたします。

《会報委員会からのお願い並びにお知らせ》

会報委員会では、会報「Physical Arts」偶数号のテーマを随時募集しています。この企画は、様々な領域や分野でご活躍の会員が多く所属しているという当学会の特色を活かし、他の学会ではなしえない方法で、身体運動文化について学際研究を進めようとする一つの試みであり、設定されたテーマについて、様々な立場から考えや意見を出し合っていたらどうかとするものです。思いつきでも結構です。下記宛によりしくお願いいたします。

また、新しい企画などについてのご意見もお待ちしております。

〒431-2102 静岡県浜松市都田町1230番地 浜松大学 国際経済学部 菊本智之まで

TEL : 053-428-7718 (D.I) FAX : 053-428-2900

E-mail : kikumoto@hamamatsu-u.ac.jp

《『身体運動文化研究Vol.7』の投稿論文の募集について》

学術刊行物編集委員会では、『身体運動文化研究Vol.7』に掲載する投稿論文の募集を行っています。

投稿の締め切りは例年にならって、平成11年10月末日とさせていただきます。投稿を希望される方は、ふるってご応募いただけますようよろしくお願いいたします。

なお、申し込みにつきましては、事務局をお願いいたします。

編集後記

会報6号では「運動文化における基礎・基本」というテーマを設定いたしました。先生方には、テーマに関するご執筆の他、書評、研究紹介などの玉稿を賜りました。原稿の集まりが関係の先生方のご協力によって、大変速やかに進み、スムーズに編集作業を進めることができたように思います。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今後も、会員相互の情報交換の場として親しまれる会報にするべく努力していきたいと思っております。

(大石純子記)

PHYSICAL ARTS No.6  
(身体運動文化学会 会報第6号)  
平成11年7月16日  
Society for Studies of Physical Arts  
身体運動文化学会  
会長 高橋 進

【事務局】〒651-2108  
神戸市西区伊川谷町有瀬518  
神戸学院大学人文学部前林研究室気付  
TEL(078)974-1551 (内線2351)